バルザック全集
14
東京創元社

バルザック全集　第十四巻

昭和五十年三月二十五日　発行
昭和五十一年一月　五　日　再版

訳者　寺田透
小松清

発行所　(株)東京創元社
代表者　秋山孝男
(162)　東京都新宿区新小川町一―一六
電話　東京(〇三)二六八―八二三一
振替　東京　一五六五

印刷・暁印刷株式会社
製本・株式会社鈴木製本所
用紙・北越製紙・富士川洋紙店

万一、落丁乱丁がありましたらお取替えいたします。

Mar. 1975 Printed in Japan. © TOKYO SOGEN-SHA

バルザック全集　第十四巻

目　次

浮かれ女盛衰記（下）……三
第四部　ヴォートラン最後の化身……五
ガンバラ……一三七
マッシミルラ・ドーニ……一九三
解　説……二六八

装幀　松田正久

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

浮かれ女盛衰記

（下）

寺田　透　訳

第四部　ヴォートラン最後の化身

「どうしたの、マドレーヌ」カミュゾ夫人は小間使が部屋に入って来るのを見て言った。その小間使の様子は、大事出来の際召使たちが上手にやってみせるあれだった。
「奥様、旦那様がただいま裁判所からお戻りになりましたが、気が転倒なさったようなお顔で、大変な御様子でございますから、奥様、きっと、御書斎においでになった方がよろしいのではございませんでしょうか」とマドレーヌは言った。
「旦那様は何かおっしゃったかい」とカミュゾ夫人はたずねた。
「おっしゃいませんでした。でも奥様、旦那様があんなお顔をしていらっしゃるのは、まだ見たことがございません。何か御病気でも起るのじゃないかと思われる程でございます。黄色くなっておしまいで、まるで腐って崩れてお行きになるような御様子です。それに……」
言葉を終りまで待たずに、カミュゾ夫人は、部屋から飛び出すと、夫のもとに駆けつけた。見ると予審判事は、両脚をのべ、頭を椅子の背にもたせかけ、両の手を垂れ、血の気のない顔に、ぼんやりした目つきをして、まったくいまにも失神状態に陥りそうな様子で安楽椅子に坐り込んでいた。
「どうしたの、あんた」と若い細君はぎょっとして言った。
「いやそれがね、アメリー、ひどく不吉なことが持ち上ったんだよ。……私はまだふるえがとまらないのだ。考えても御覧。検事長が……。そうじゃない。セリジーの奥さんが……いや何が……私はどこから始めていいのか見当がつかない……」
「おしまいからお始めになったら」とカミュゾ夫人は言った。
「それじゃね、初審裁判所の評定室で、ポピノさんが、私の書いた報告をもとに免訴の判決を下し、判決書のはじに必要な最後の署名をしていたちょうどそのとき、……その報告でリュシアン・ド・リュバンプレも放免ということだったんだが……。とうとう、何もかもおしまいさ、書記が判決控簿を持って出て行き、私は、この事件の片はつくと思っていたんだよ。……ところがそこへ裁判長が入って来

て、判決を調べるのさ。
『君は死者を釈放するんですか』と、そうあの人はつめた*い、からかう様子で言うんだ。『あの青年は、ボナルド*氏の表現をかりていうと、自然の裁判官の前に行ってしまいましたよ。電撃性卒中で倒れてしまったんです』
私は、偶然ことが起ったのだろうと思って息をついたんだ。
『裁判長、私の理解が正しいとすると、それはビシュグリュの卒中*ということでしょうね』と言ったのはポピノさんさ。
『皆さん』とそこで裁判長はいつもの荘重な様子にかえってね。『いいですか、世間に対しては、リュシアン・ド・リュバンプレ青年の死は、動脈瘤破裂のためという*ことにして下さい』
私たちは目と目を見合せたよ。
『この歎かわしい事件には身分の高い人たちが関係しているのです』と裁判長はおっしゃった。『カミュゾさん、あなたは、あなたの義務をつくされただけですが、神様の思召しで、セリジーさんの奥さんが、お受けになった打撃のためにあのまま気がふれておしまいにならないといいですがね、他でもないあなたのためにね。あの方は半死半生の体で今運ばれて行くところです。私は検事長さんについさっき出会いましたが、その絶望しきった御様子と来たら、私まで苦しくなったくらいです。カミュゾさん、見当違いをなさったもんですな』と、そうあの方は私の耳に口を寄せて言い足されたんだよ。
参った、お前。外へ出ようとして、私は歩くのがやっとだったよ。脚がふるえて、やたらに表に出る気にはなれなかったから、私は、休むつもりで執務室に行ったのさ。コカールがこの間*の悪い予審の一件書類の整理をしているところだったが、そのコカールがこんな話をした。一人の綺麗な貴婦人がラ・コンシエルジュリーを急襲奪取して、自分が夢中のリュシアンの命を助けようとしたが、リュシアンが『古金貨』のガラス窓でネクタイを使って首くくりをしているのを見て、気を失ったとこういうんだ。ここだけの話だが、あの不幸な青年は、無論、完全に有罪なんだ。ただもしかしたら私の訊問の仕方が原因であの青年は自殺を図ったのかも知れないという考えが、裁判所を出てからこっち私を追いまわし、私は、やみなし、今にも気を失いそうなんだ……」
「でもいいこと、あんたの手で釈放されようとしていた未決囚が、牢屋で首をくくるからって、あんた、自分を暗殺犯だなんて思わないでしょうね。……そりゃ、そういうときの予審判事は、乗りつぶした馬にまたがる将軍みたいなものでしょうけど。……それだけのことだわ」とカミュゾ夫人は叫んだ。
「その喩えは、せいぜい冗談に向いた喩えだよ。ところが冗談はいま季節はずれだ。いいかい。この場合は遺産の即時継承を死者が生存者に襲いかかるというだろう、それなんだ。リュシアンは私たちの希望を棺桶に入れて持って行

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ってしまうんだ」
「ほんとにそう。……」とカミュゾ夫人はしんから皮肉な様子で聞きかえした。
「そうだとも。私の経歴も終りだよ。私は一生、セーヌ県裁判所の一介の判事のままでいるだろう。グランヴィルさんは、今の因果な出来事の起る前から、予審の運び方に大変不満だったのだ。あの人がうちの裁判長に言った言葉からして、グランヴィルさんが検事長でいるかぎり、私が陞進しっこないことは私にはわかっている」
陞進、これは恐るべき言葉だ。この観念こそ、今日司法官を官吏に変ぜしめているのだ。
昔の司法官は、彼がならねばならぬものに間違いなく即座になれた。裁判長のかぶる丸帽子三つか四つあれば、各裁判所の野心に応ずるに足りたものである。パリにおいてもディジョン*においても、評定官の職が、モレ*のような人物をもブロスのような人物をもよく入れえた。この職は、それ自身すでに一財産であるが、これを立派に持ち耐えるには一大財産が必要であった。最高法院をのぞくと、パリの法服人士たちが、望みをかけうる上位の身分はただの三つ、総監督か国璽職か大法官の長衣だけであった。最高法院以下の下位の世界では、初審裁判所所長代理は、一生涯喜んでその席にとどまっていられる羽振りのよい人物ということになっていた。一八二九年の、財産といえばその俸給のほかなにもないパリ王国裁判所評定官の地位を、一七二九年の最高法院評定官の地位にくらべてみるといい。その差異や大。金銭を全般的な社会的保証としている今日では、司法官は、昔のように、大財産を所有しなくてもすむ。だから見られるとおり、彼らは代議士、上院議員となり、司法界の上にさらに司法界を積み上げ、裁判官兼立法者として、当然彼らの栄光の源でなければならぬ地位ではない別の地位へ権勢を借りに行くのである。
要するに、司法官たちは、軍隊や行政界における陞進と同じように、陞進せんがためにぬきん出ようと考えているのだ。
こういう考えは、司法官の独立をそこなわないにせよ、あまりにも知れわたり、かつ当然すぎ、その結果はあまりに目につきすぎていて、司法界はその威厳を輿論に対して失わざるをえない。国家の支払う俸給のために僧侶と司法官が、役人になる。獲得すべき等級が野心を助長する。野心が権力にあいそよい顔をする風を生む。それから、近来の平等が、裁判に付さるべき人間と司法官を、同じ社会の床板の上に立たせる。かくのごとくして、あらゆる社会秩序の二柱石たる『宗教』と『司直』は、十九世紀に入ってから衰頽してしまった。その癖ひとは、万事万端進歩しつつあると称しているのだ。
「またどうして陞進しないなんておっしゃるの」とアメリー・カミュゾは言った。
彼女はからかうような態度で夫をながめた。自分の野心を荷い、自分がちょうど道具のように操っている人間に、元気をつける必要を感じたのである。

「どうして絶望する必要があるの」未決囚の死亡については自分は無関心だということを絵にかいたようにはっきり見せる仕草をして、彼女は言葉をついだ。「その自殺のおかげで、リュシアンの二人の敵は喜ぶじゃないの。つまりデスパールさんの奥さんと、奥さんのいとこのシャトレ伯爵の奥さんよ。デスパールさんの奥さんは、国璽尚書とそりゃ仲がいいのよ。だからあの方を通して、あんた、閣下にじきじき会って頂けるわ。そこで閣下に、この事件の秘密をお話しすればいいじゃない。こうして、司法大臣が味方になって下されば、あんな裁判長だの検事長だの、何も心配することはないじゃない」

「でもセリジーさんの御夫妻がね。……」と哀れな判事は叫ぶように言った。「セリジーさんの奥さんは気が違ってしまわれたんだよ、繰り返していうがね。しかも私の間違いから気が違ったとみんな言っているんだ」

「だって、気が違ったというのは、判断力のない裁判官になったということなんだから、あんたに害を与えることはないでしょう」とカミュゾ夫人は笑いながら大声で言った。「さあ、きょう一日中の事の次第をすっかり話して御覧なさい」

「それが困ったことなんだ」とカミュゾは答えた。「私があの不仕合せな青年に白状させて、さてそれからあれが例の自称イスパニア司祭はジャック・コランに間違いないと宣言したばかりのところへ、モーフリニューズ公爵の奥さんとセリジーさんの奥さんが、侍僕を一人使いによこして、あれを訊問しないでくれとちょっとひとこと頼んで来たのだ。万事は完了したあとでさ……」

「それじゃあんた、頭がこんがらかっていたんだわ」とアメリーは言った。「だって、あんたは御自分の録事書記は信用できると思っていらっしゃるんですもの。リュシアンを呼びもどし、うまく安心させておいて、あんたの訊問調書を訂正できたはずですものね」

「それじゃ、お前もセリジーさんの奥さんと同じで、裁判所を馬鹿にしているよ」と自分の職業を愚弄できないカミュゾは言った。「セリジーさんの奥さんは私の調書を取り上げて、火に投げこんだのだ」

「それこそ女というものだわ。すてき」とカミュゾ夫人は叫んだ。

「セリジーさんの奥さんが私に言うには、モーフリニューズ公爵の奥さんと御自分の寵愛を受けていた青年を、徒刑囚と一緒に重罪裁判所の被告席にむざむざ行かせるくらいなら、裁判所をけし飛ばしてみせるというんだよ。……」

「でもカミュゾ、あんたの位置は絶対よ……」とアメリーは、優越の微笑を抑えることができないで言った。

「おお、そうとも絶対だ」

「あんたはあんたの義務を果したんでしょう……」

「が、それが不幸にもそうなんだ。しかもグランヴィルさんのヤソ会*式の忠告にそむいてね。あの方と私はマラケー河岸で会ったんだが……」

「けさのこと」

「けさのことだよ」
「何時に」
「九時だった」
「ああカミュゾ。私がのべつ、あんたになんにつけ用心するようにって繰り返しているのに……」とアメリーは手を握り合せて、それをねじるようにしながら言った。「なんということでしょう。私が引っ張っているのは人間じゃなくて、切り石を積んだ荷車なんだわ。……いいこと、カミュゾ、検事長さんは、あんたを途中で待っていたのよ。そして、いろいろ勧告して下さったにちがいないわ」
「そうなんだよ……」
「ところがあんたは飲み込めなかったというわけね。あんたがそんなつんぼでは、あんたは一生なんにも教わるところもなく、予審の判事でいるにちがいありませんわ。せめて、私のいうことをよく聞くだけの智慧才覚はお持ちなさいね」そういうと彼女は、返事をしようとした夫の口をふさいだ。「あんた、事件を終ったものと思っていて」とアメリーはきいた。
カミュゾは、大法螺吹きの前に立った百姓の体で、自分の妻を見守った。
「かりにモーフリニューズ公爵の奥さんとセリジー伯爵の奥さんが連累だっていうんなら、お二人をお二人ながら保護者にできるはずじゃありませんか」とアメリーは言葉をついだ。「よくて。デスパールさんの奥さんのお口添えで国璽尚書にじきじき会って頂けるでしょうから、そのとき事件の秘密を大臣にすっかりお話しすればいいのよ。そうすれば大臣はそれを話の種に国王様を面白がらせてお上げになるわ。君主というものはどのお方もつづれ織りの裏を知るのがお好きで、世間の人たちが口をぽかんとあけて進行を眺めている事件の本当の動機はどんなものかを飲みこむのがお好きなものですからね。そうなったらもう、検事長もセリジーさんも心配するには当らないわ……」
「お前みたいな女はなんともまったく宝物だね」と判事は勇気をとりもどして叫んだ。「結局、ジャック・コランを狩り出したのは私なんだ。奴を重罪裁判所に送って、自供させてやろう。そうして奴の犯罪をあばいてやる。こういう訴訟は、予審判事の職歴の中では、まさに一つの勝利だ……」
「カミュゾ」アメリーは、自分の夫が、リュシアン・ド・リュバンプレの自殺によって投げ込まれた精神、肉体両面の虚脱から抜け出るのをよろこばしげに見ながら言葉をついだ。「裁判長はさっき、あんたが見当違いをしたとおっしゃったそうだけど、でも今となると、見当が良すぎたくらいよ。……また間違いをしでかすんじゃないの、え」
予審判事は、おどろきあきれた恰好で妻を見つめたまま、じっとつっ立っていた。
「国王様も国璽尚書もこの事件の秘密をおききになればきっと満足なさるでしょう。と同時に、セリジーさんとかモーフリニューズさんとかグランリューさんとか、要するにこの訴訟に直接間接に関与したあれやこれやの人たちのよ

うな身分の高い人たちが自由主義的な意見の弁護士の弁論のおかげで、輿論と重罪裁判の法廷に引き出されるのを御覧になるのはにがにがしくお思いでしょう」

「あの人たちは揃って頭を突っ込んでいる。……みんな私の掌中にあるんだ」とカミュゾは叫んだ。

判事は立ち上ると、窮地を脱しようとつとめる舞台のスガナレルのように、書斎中を歩きまわった。「アメリー、よくお聞き」と彼は妻の前に様子を作って立つと口をきった。「今思い出されるある一つの情況があるんだ。それは一見瑣末なようだが、現在の私の立場では、主要な関心的になることなんだ。いいかね、一つ想像してもらいたい。あのジャック・コランは、詐術、瞞着、策謀の巨人で、遠謀深慮の男なんだ。……まったくあれは……なんというか……牢獄のクロムウェルなんだ。……私はあんな悪党には出会ったことがない。あいつは私をだましたと言ってもいいくらいなんだ。……しかし刑事予審では、ちょっと糸口が出たらかならず糸毬は見つかるもので、迷路のような暗晦きわまる良心の中でも、あるいは晦渋きわまる事実の中でも、この糸毬をもって歩きまわればいいのだ。ジャック・コランは、リュシアン・ド・リュバンプレの住居で押収された手紙を私がばらばらやっているのをみると、何かほかの手紙の束がそこにありはしないか見てやれという目つきでじろりと眺めたが、そのとき明らかに満足らしい素振りを洩したものだ。その財宝を値踏みする泥棒のような目つき、その『おれには武器があるぞ』と考える未決囚のような身振りをみて、私は実に沢山のことがわかった。お前たち女ばかりだ、私たちと未決囚がやるような、まるで安全錠みたいに複雑な欺瞞が正体をあらわすいろんな情景を、一つ目つきのやりとりのうちに、まるまる全部投げ入れられるのはね。わかるかい、一秒間で何冊分にも当る疑いを言い合うんだ。身ぶるいが出るようなことだよ。ちらっと見る目のうちに生死の決があるんだ。したたか者め、他の手紙も握っているな、と私は考えたよ。そのあと、事件に関係した沢山のこまかいことがらに気をとられて、私は、不意に起ったこの出来事をいい加減にしてしまったのだ。というのは、私は二人の未決囚を対決させなきゃならないから、もう少したてば予審でこの点を明らかにできると思ったのだ。しかしジャック・コランが、ああいう悪人の習慣通りに、あの美青年の手紙のうちで一番あぶない手紙は、何通かはわからないが、安全な場所に隠したということはたしかだと見ていいだろうじゃないか。何せあの青年を慕っていた婦人の数と来たら……」

「それであんた震えているのね、カミュゾ。あんた王国裁判所の裁判長になれるじゃないの、私の予想よりずっと早く……」と叫んだカミュゾ夫人の顔は輝いていた。「いいこと。あんた、みんなを満足させるような具合に振舞わなくちゃいけないわ。だって、事件は私たちの手から**盗まれ**てしまう惧れが出たくらい重大になって来たんですもの。……デスパールさんの奥さんが御主人相手に禁治産の訴訟を起そうとたくらんだとき、手続きをポビノの手から取り

上げて、あんたに委せようとしたことがあるじゃない」彼女は、カミュゾが驚いた身振りをすると、それに答えるようにそう言った。「そこでよ、検事長はセリジーさん夫妻の名誉にそんなにむきになっていらっしゃるんですもの、事件を王国裁判所に移して、改めて予審をするために、最屓の評定官の体面をそこなう惧れのあることをするわけはないじゃないの」

「おお、その通り。お前、お前は一体どこで刑法の勉強をしたんだい」カミュゾは叫んだ。「お前はなんでも知っているね。私の先生だよ……」

「何をおっしゃるのよ。あんたは、あのジャック・コランがきっと自由主義の弁護士をうまく見つけ出して多分それに弁論させるだろうから、あすの朝、グランヴィルさんはそれで肝をひやすだろうとは考えないの。金をくれてまでジャック・コランの弁護人になりたいと申し出るものが現われると思うのよ。……あの身分のいい奥さん方は、あんたの知っている以上とまでは言わないにしても、同じくらいよく、自分たちにせまっている危険を知っているわよ。そしてそれを検事長に通報するに違いないわ。ところが一方検事長は、前から、グランリュー家の令嬢の許婚者のリュシアン・ド・リュバンプレ、つまりエステルの恋人で、モーフリニューズ公爵令夫人の昔の恋人で、セリジー夫人の寵児のリュシアンがよ、その徒刑囚と一心同体だったばかりに、こういう方々の家庭が今にも被告席に引き出されそうだということを御存じよ。だからあんたは、あの検事長の情愛と、セリジーさん、デスパール侯爵の奥さん、デュ・シャトレ伯爵の奥さんの感謝と折合いをつけた上、グランリュー家に庇護をしてもらってそれを通してモーフリニューズさんの奥さんの庇護を一層強め、お勤め先の裁判長さんにお世辞を言わせるように、舵をとらなきゃいけないわ。デスパールの奥さん、モーフリニューズの奥さん、グランリューの奥さんのことは、私が引きうけます。あんたはあすの朝、検事長のところへ是非行くのよ。グランヴィルさんという人は、奥さんと一緒に暮していらっしゃらない人なのよ。もう十年ばかり、ベルフーイユという家の娘さんを愛人にしていて、その人との間に庶子が何人かあるんじゃない。だからさ、あの司法官も聖人じゃないのよ。他の人とまったく変らない人間よ、誘惑できるわ。どこかにきっと摑まえどころはあるわ。弱みを見つけて、そこをちやほやするのよ。意見を求めて、事件の危険さに目をあけてやるといいのよ。要するに、ふたり連れだって危い橋をお渡りなさいね。そうすればあんた……」

「いやいや。私はお前の足あとに接吻しなきゃならんよ」とカミュゾは妻の言葉をさえぎって、体に手をまわし、心臓の上に抱きしめて言った。「アメリー、お前は私を救ってくれた」

「あんたをアランソンからマントへ、マントからセーヌ県裁判所に綱をつけて引っぱって来たのも私よ」とアメリーは答えた。「まあいいわ、落ちついていらっしゃいね。……私、これから五年後には、裁判長の奥さんと呼んでもら

いたいの。でもねえ、いいこと、いつでも決心をつける前には、長い時間をかけて考えて頂戴ね。判事という職業は、消防隊員の職業とはちがうのよ。あんたの書類に火がつくなんていうこと、あるわけがないのよ。あんたには十分熟考するゆとりがあるのよ。だからあんたの地位で馬鹿げたことをしたら、言いわけの余地はないのよ……」

「私の立場の強みは、一にも二にも、贋イスパニア司祭とジャック・コランが同一人だということにかかっている」と判事は長い間言葉をとぎらせていたあとで話し始めた。「この同一性さえ一たび確定すれば、よしんば、裁判所がこの訴訟の審理裁判権は自分の方にあると主張しても、これはもう永久に既得権のある事実となって、判事にせよ評定官にせよ、およそ司法官たるもの、ほうり出すわけには行かないんだ。私は猫のしっぽに古鉄を結びつける子供のまねをしようと思う。予審がどこで行われようと、訴訟手続がある限り、ジャック・コランのしるしの鉄の鎖がいつでも鳴りひびくだろう」

「まあすてき」とアメリーは言った。

「そうなれば、検事長は他の誰とより、私と意志を疎通させたいと思うに違いない。私だけが、そのサン＝ジェルマン地区の心臓の上にかかったダモクレスの剣*を取りのけられるんだからね。……しかし、そういう見事な結果を手に入れることがどんなにむずかしいかお前にはわかるまい。……検事長と私は、さっき検事長室で、ジャック・コランを、彼がいう通りのもの、つまり、トレドの本寺僧団づきの修道僧、カルロス・エレーラとして受け入れようという取りきめをしたのだ。つまり、彼の外交使節としての資格を認め、イスパニア大使館が彼の身柄引渡しを要求するに委せようという取りきめをしたのだ。この計画に従って、私は、リュシアン・ド・リュバンプレ釈放の報告を作成したのだし、また担当の未決囚の訊問調書をまるで雪のように白くした上、改めて作り出したわけだ。あすは、ラスチニャック、ビアンション、そのほかなお誰だったか、そういう諸君がトレドの勅願本寺僧団づき修道僧と自称する男と対決することになっているが、みんな彼をジャック・コランだとは認めないだろう。十年前のこと、あの人たちはある下宿屋でジャック・コランをヴォートランという名で知っていて、奴の逮捕も目の前で行われたんだがね」

ちょっと沈黙があたりを領した。その間カミュゾ夫人は熟慮をめぐらしていた。

「その未決囚がジャック・コランだという確信があって」と彼女はたずねた。

「あるよ」と判事は答えた。「検事長にしても同じさ」

「じゃ、法服の毛皮の下から、猫の爪を覗かせないようにして、裁判所に一騒動おこさせて御覧なさいな。その男がまだ密房にいるなら、すぐラ・コンシエルジュリーの典獄に会いに行って、それが徒刑囚本人にちがいないとみんなが認めるようにするといいわ。子供のまねなんかしないで、専制国の警務大臣のまねをなさいよ。ああいう連中は、元首に対する陰謀をひねり出しておいて、さもそれを

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com